



■ゲスト■

酪農学園大学 准教授  
井坂 光宏先生

獣医療を起点とし、人とペットの間にある課題を解決するスタートアップスタジオ「QAL startups」。その中心メンバーにして、獣医師・連続起業家である生田目康道（QAL startups代表取締役）が獣医師業界の様々なキーパーソンとの対話を通じ、様々なビジネスヒントを提供していく連続対談シリーズ。

また、医学からの応用を考える場合には、サイズの的にも小児科をベースに考えることが多いです。実際に、使用方法やサイズの適用上は一般成人の医療には合いませんからね。とはいえ、医療から動物医療の標準的なものとして定着するには、我々が試行錯誤しながら研究や研修などを重ねていく必要があります。そのためには、臨床工学技士・臨床検査技師・医療機器・器具など、医療関連分野から学ぶことはたくさんあります。

な分業もされていない、だから生産性が低い。しかし、これも個々人の技術や修練度合いの問題だけではなくて仕組みやサービスが不足していることが一つの原因かもしれません。今現在、大学教員をしているからですかね。実際に、そのような環境が改善されないと、小動物臨床医が不足するのも当然です。

獣医師のキャリア形成に不足している起業教育

生田目：井坂先生は学生や若手の獣医師とのつながりも多いと思います。その中で、講義やセミナーで伝える必要がある内容にはどのようなことがありますか？

獣医療の中で不足している先端技術

生田目：獣医療の発展という観点から、新規参入事業で注目領域はありますか？

井坂：圧倒的に足りないのは、起業教育ですね。事業を興す・起業をするという実務的な部分ではなく、起業家のマインドです。我々の頃と比べると、大学の偏差値はまだまだ高いので、大半の学生は学力的には成功し、入学してきています。覚えることに関しては優秀ですが、挑戦することは苦手な学生が多いです。失敗しないための教育ではなく、失敗しながら成長し、成功していく。そのような考え方を教え、鍛える必要があると感じています。確かに、クリティカルな失敗をして致命傷を負ってはいけませんが、チャレンジしない限りは成長できません。つまり、成功の反対は失敗ではなく行動しないことであることを教えていきたいです。

井坂：よく取り上げられる話で言えば、ARなどのテクノロジーを活用した医療技術や教育システムが不足していますね。最新技術や情報がもっと活発に入り、活用できる環境ができると技術習得も、もっと楽にできるとは思います。結果として、小動物臨床医を志す若い獣医師が学びやすい環境になりますし、ひいては飼い主さんや動物たちの幸せにもつながります。現時点では、飼い主さんとペットに対する直接的なサービスやプロダクトも多く出てきていますが、個人的には教育、技術習得や労働環境の改善改良につながるものが必要だと思います。アメリカでヒトの小児心臓外科に勤めた経験から見ても、とにかく診療効率も悪い。獣医師間・動物看護師間での、明確

獣医療業界における新規事業開発

生田目：井坂先生は、獣医学の大学教員であり医学分野での研究が行われていますので、企業と接点をお持ちだと思いますが、業界内外の企業が動物医療業界での新規事業に挑戦することについて、どのように受け止めていますか？

井坂：ヒト医療の分野から獣医療分野への展開可能性として、ご相談を受けることはよくあります。獣医療の発展や技術革新に繋がる内容であれば大歓迎です。既存の獣医療領域にある情報や技術だけでは足りない分野を、医療領域からアプローチ・革新ができるのは非常に有用なことだと思っています。他業種、他分野とのコラボレーションにつなが

る新規事業は積極的に実施してほしいです。

医療面から、動物医療を診る

生田目：現在の獣医療領域で、足りていない部分はどこだと感じますか？企業や参入者が動物医療領域に入る際にどの領域を狙ったら成功確率を高められると感じますか？医療や二次診療の面から、カバーしきれていないと感じる点も含めてお願いします。

井坂：ヒトの医学分野でも新規参入や新規事業は多くあります。獣医療において圧倒的に進んでいない分野は臓器別の診断治療ですね。科目別の臨床や研究が進んでいる医学分野と比較すると圧倒的に少ないです。

そういった意味で、チャレンジ精神を持つ学生をどれだけ育てられるかが重要だと思っています。

## 動物医療への参入で必要なこと

**生田目：**医療やコメディカルからの獣医療への参入で、井坂先生が違和感を持ったり、ずれを感じることはありますか？

**井坂：**獣医療は医学から学ぶべし。それ自体も違う面はあると思います。近年着目されるZoobiquity（ズービキティ）としては、ヒト医療と動物医療のコラボによるヒト医療面の問題解決が可能になっています。アメリカ国立衛生研究所（NIH）でもヒトの老齡モデルとして犬が類似するといわれています。

ただ、動物病院をはじめとした小動物獣医療は、本来はアナログな業界です。小動物臨床でもそうですが、検査数値のみを見て、動物を診ていないというのは本末転倒ですよ？動物を対象としたビジネスを行う際には、本質的に動物に対する愛情が必要です。とはいえ、情緒だけではビジネスはできません。愛情に基づいて成り立っていて、人と動物の関係を正しく理解せずに、他業界のビジネスモデルや事例を持ち込むだけでは決して成功しません。我々獣医師からだけではなく、ペットオーナーにも必ず見抜かれます。「ヒトと動物をつなぐビジネス」難しいですね(笑)

**生田目：**確かに難しい面ですね。



井坂 光宏

酪農学園大学 獣医学科 准教授  
北海道大学大学院医学研究科 非常勤講師  
アジア獣医内科学（循環器）設立専門医  
日本獣医循環器学会認定医



生田目 康道

獣医師、連続起業家。2003年に独立起業。その後17年で動物医療領域を起点とした7社の創業と経営を経験。2009年には、株式会社ペティエンスメディカル（現株式会社QIX）代表取締役社長に就任。ペットとペットオーナーに"本当に必要なモノ"を提供すべく顧客ニーズと時代変化を見据えた数々の商品を手掛ける。

2018年12月より掲げた、動物の生活の質（Quality of Animal Life）つまりQALを向上させるというビジョンのもと、2020年に株式会社QAL startupsを設立。業界内外のパートナーとともに、QAL向上に資する各種プロダクトと事業の開発に取り組んでいる。

### 《 対談後記 》

今回の対談相手である井坂先生は、臨床獣医師として動物病院の現場でキャリアを持ちながら、現在は大学の教員をされている異色の獣医師。その間、研究活動をずっと続けられ、多くの論文も出されています。

また、学生さんの教育もされながら、外部の企業や専門医とも交流を持ち、とても幅広い視点で動物医療や動物病院市場を見ている方です。

その長い経験の中で、やはり不足していると感じるのは『ヒトと教育』にかかわる分野。専門分野としての動物医療の研鑽だけではなく、もっと広い視点で獣医師に対する教育が足りていないと指摘されていました。

今回の対談の中でも新規参入に関するたくさんのヒントがあったと思います。市場を画一的にデータでとらえたり、医学や医療をそのまま当てはめて動物医療を考えるのではなく、『ヒトと教育』に注目して見直してみるとまだまだたくさんの可能性がありそうだと期待させていただける対談になりました。

お忙しい中ありがとうございました。